

【第一話く就職する生徒会く】

「手に職をつけておいて、損はないのよ！」

会長がいつものように小さな胸を張ってなにかの本の受け売りを偉そうに語っていた。
「珍しく、地に足のついた言葉ですね」

俺が少し驚きながら言うと、会長は「失礼なっ」と憤慨する。

「私はいつだって、地に足がついているよ！」

「ええー。実際、その椅子に座ってても、足ぶらんぶらんしてるじゃないですか」

高校生の平均身長に合わせた椅子に対し、彼女は小さすぎた。

「そ、そういう意味じゃないでしょ！」

「まあそうですけど。本当の意味の方にしても、ですよ。会長の足が地についていたことなんて、無いじゃないですか」

「なにその失礼な発言！ つきまくりだよ！ どっしーんだよ！」

「むしろふっわふわじゃないですか。放っておいたら、大気圏突入する勢いじゃないです

か」

「私、そこまで軽く思われてるの！？ まったく……」

会長はふんぷんと怒りながらも今日の議題をホワイトボードに記す。全て描き終ったところで、知弦さんがそれを読んだ。

『将来になりたいもの』？」

「うん！ 今日はこれについて、皆でしっかり話し合おうと思うの！」

小学生の作文テーマみたいなのを言い出した。いつものように役員達からため息が漏れる。

「相変わらず、自信満々で生徒会に関係ねえネタ提供してくるな……」

「むしろ真冬達、ちゃんと働いていることの方が希じゃないかな、お姉ちゃん」

俺のクラスメイトで同じ副会長の熱血少女、椎名深夏と、その妹にしてインドア会計の椎名真冬ちゃんも、やる気を奪われた瞳の色。

「一応訊くけど、アカちゃん」

書記にして会長の親友である知的美人、紅葉知弦さんが、会長へと確認をとる。

「今日のテーマは、学校の行事とかに関係は——」

「ないよ！」

「そうよね」

知弦さんは、もう今更落胆もしないといった様子で、その答えを受け流していた。俺達もまあ、似たような心境だ

会長はといえば、今日も今日とてその小さな体を椅子にふんぞり返らせている。

「生徒会の長として、役員達がちゃんと将来を考えているのか、把握しておかないといけないと思ったの！」

「思っちゃいましたか」

相変わらず脈絡がない人だ。そして俺も他メンバーも、この人に将来の心配だけはされたくない気がした。

深夏が「けどよお」と不満な様子で抗議する。

「なんか前もそんな話しなかったっけか。ほら、鍵が、ホストになりたいやらエロゲ作りたいやら言ったり、会長さんが最終的に地球を支配する構想あったり」

「うん、やったね。深夏が、お嫁さんになりたいんだっけ？」

「こ、こほん！ とにかく、この話題は前もやったる！ だから……」

「甘いわね！」

会長は、バンツと机を叩く。……ちなみに、たまに後で「手が痛い痛いだよ……」と

か言って知弦さんにさすって貰ったりしているのは、ここだけの話だ。

「今日は、より具体的に、どんな職につきたいのかを考えるのよ！」

「具体的に……ですか？」

真冬ちゃんが首を傾げる。会長は「そう！」と今日も張り切っていた。

「早い段階からちゃんと目指す職業を決めておけば、なにかと有利なのよ！ むしろ、漠然と生きてたら、真冬ちゃんみたいになっちゃうのよ！」

「どーいう意味ですかっ！」

『それは確かに困るな（わね）……』

「皆さん」

急に真冬ちゃんアウエーだったが、確かに会長の言うことにも一理あるのだ。俺はハレム王という夢を持って全力で生きているが、実際問題、周囲には全く目標も無く漫然と生きている生徒が沢山いる。それは必ずしも怠慢ではないけど、しかし、彼らの日常が充実していると言い難いのも事実。具体的な目標は、あった方がいいとも言える。

「真冬ちゃんみたいになつてからじゃ、遅いでもんね……」

「先輩!? 今、なんかサラッと真冬の心を斬り裂いて行きましたよね!？」

「そうだな。あたしもそろそろ、ちゃんと考えよう！」

「お姉ちゃん!? 今、明らかに真冬を見て決意したよね!」

「目が死んでいる子は、生徒会に二人もいらないというわけね」

「紅葉先輩! 一人は、誰のことを指しているんですか?! ねえ! ねえったら!」
相変わらず不憫な真冬ちゃんを無視して、会議は進行されていく。

会長は、「ではっ!」と仕切った。

「皆、具体的に何になりたいか考えて、一回、会話だけでもシミュレーションしてみようじゃない」

「ああ、それは面白そうですね。よし、じゃあ早速、俺のハーレム王という職業をシミュレーションしてみて——」

「杉崎以外で、シミュレーションしてみたい人——!」

「ふ。……そういうことですか、会長。貴女はこう言いたいわけですね。既にこの生徒会はまだハーレム状態、会長達は俺にメロメロなもんだから、これ以上シミュレーションも何もあつたもんじゃないという——」

「そういうことなら、会長さん! あたし、やってみたい職業あるぜ!」

「お、いいわね、深夏。やってみようじゃない」

「……………」

最近、俺のセクハラへの対処法が「無視」というカタチで確立されつつあるんですが。

誰か、助けて下さい。ちよっと泣きそうです。俺みたいなお調子者属性は、スルーされるのが一番辛いんです。

完全無視状態だとボツキリ根本から心が折れそうなので、俺は、仕方なく議題に沿ったカタチで会話に入って行く。

「……で。深夏、何やりたいんだ? お前、あんま夢とかなかったんじゃない?」

「それとこれとは話が別だぜ、鍵。リアルに考えたらあたしは真冬を養うためにも堅実なOLだが、しかし、『やってみたい職』ってんなら、そこそこあるんだぜ」

「お嫁さんか。どれ、だったら俺が新郎役をやってやる——」

「バツ、ちげえよ! そうじゃねえよ!」

「なんだ、深夏はお嫁さんになりたくないのか?」

「い、いや、お嫁さんにはなりたくないけど……って、そうじゃねえ! あたしは、もつと他の職業がやってみたいんだっ!」

「他の職業? なんだよ。相手役なら、やってやらんこともないが」

「お、そうか? じゃあ付き合って貰おうかな」

「おう。どんと来い」

こうして、生徒会役員達の就職シミュレーションが開始された。

シミュレーションその1 花屋・椎名深夏

登場人物……花屋・椎名深夏

お客(サラリーマン・妻帯者)・杉崎鍵

お客「すみません」

店員「はい」

お客「妻の誕生日に、花を贈りたいと思つているのですが……」

店員「まあ素敵！」

お客「……………」

店員「お客様、なぜげんなりされた表情をなさるのですか？」

お客「だって深夏にそのキャラ無理がありすぎ——いや、なんでもないです。なんでもないので、とりあえず、拳を構えるのやめて下さい。え、ええと、そんなわけで、妻にどん

な花を贈つたらいいか、見繕つて頂きたいのですが」

店員「ええ。そういうことでしたら……。ふんふんふーん♪ ええと、これとこれと」

お客「……ちなみにどういう基準で見繕つてらっしゃるんですか？」

店員「あ、はい。奥様へのプレゼントとのことでしたので、テーマを『合体ロボ』に設定して、見繕わせて貰っています」

お客「なんで!? なんで妻への花束がそのテーマの下製作されてんの!？」

店員「ウーーン、ガッシャ。ウーーン、ガッシャ。チュイーン! ビカビカー!」

お客「どういう手法使ったら花束からそんな擬音が!? いや、もつと、可愛いのにして下さいよ!」

店員「ええ? そうですか? 仕方ありませんね。じゃあ、一度この全長百メートルの『超絶花神合体ハナサクダー』をバラさないと……」

お客「この数秒の間にどんだけ製作されてんの!? いいから、普通に花束作って下さい!」

店員「かしこまりました。じゃあ、これとこれとこれと、これで」

お客「お、どんな風に仕上がりました?」

店員「タンポポ四本輪ゴムで留めました」

お客「子供!? 三才児!? ハナサクダーを作った技術は、どこいったんだ!」

店員「三万九千八百円になります」

お客「たっか！ これでその値段なら、ハナサクターなんか……」

店員「十五円です」

お客「やっす！ とにかく、タンポポはやめてくれ！ もっと、普通の花束にして！」

店員「お言葉ですが、お客様。普通という注文が、一番、困るのです」

お客「う、一理あるな。じゃあ……妻への愛が、如実に表現された感じがいいかな。ほら、ベタなので言えば、薔薇の花束みたいな」

店員「かしこまりました。では……これと、これと、これで」

お客「お、どんな風になりましたか？」

店員「はい、お客様の要望通り、薔薇をふんだんに使いまして……」

お客「お、いいね。じゃあそれで——」

店員「花文字で『呪』と描かせて抱きました」

お客「なんでだよ！ 俺の妻への気持ち、どんだけ歪んでんだよ！」

店員「あ、すいません。『怨』の方がよろしかったですか？」

お客「そういうマイナーチェンジの問題じゃないから！ そもそも、花文字作るな！」

店員「奥様への気持ちが伝わりやすいかと……」

お客「俺、奥さんちゃんと愛してるから！ 変なドロドロ設定、つけ加えなくていいからっ！」

店員「さようでございますか。では、こちらの、薔薇で般若を描いた力作を……」

お客「絵もやめい！ そしてなぜ般若！ チョイスがいちいちおかしい！」

店員「実写つぼいのがいいですか？ じゃあ、このスマイルで描いた梅宮○夫さんでも……」

お客「力作っ！ でもいらない！ 全然いらないから！ 俺どころか、梅宮さん自身もおそらくいらないからっ」

店員「うーん……お客様は、中々の困ったさんですね。世界でもトップクラスの超一流技術を持つ、この、フラワーショップ椎名の商品に満足なさらないとは……」

お客「技術力が凄いのは認めるけどね！ その分発想力が残念だよね！」

店員「……うっせえなあ」

お客「今一瞬、素が出ましたよね！ 悪態つきましたよね、客に！」

店員「なにをおっしゃいますか。フラワーショップ椎名における接客三箇条は、『親切、丁寧、冒涇』ですよ」

お客「最後のはなに！？ どういう意味！？ 確かに色々納得だけどっ！」

店員「ところでお客様。大変申し上げにくいのですが、お顔が気持ち悪いですね」

お客「ホント申し上げにくいこと言ったな！　つつうか言うな！」

店員「そんなわけで、しょーじき飽きましたんで、フラワーショップ椎名、本日はこれにて閉店とさせて頂きます。お忘れ物なさらぬよう、お帰り下さい。……あ、そちらのお客様！　薔薇般若をお忘れですよ！」

お客「誰か買ったんだ、アレ！　そして閉店すんな！　俺まだ買ってない！」

店員「そんな貴方にこれ。今のやりとりの間に、近くの花屋へ注文して届けて貰った、普通の花束！　元値三千九百八十円のところ、マージンをとりまして、なんと驚き価格、一万二千八百円！」

お客「確かに驚きだ！　なにそのボツタクリ！　もうそれでいいや、それくれ！」

店員「金が先だ！」

お客「なんで急に誘拐の取引みたいなテンションに！？　ほ、ほら、金」

店員「……ふん。まあいいだろう。ほうらよ」

お客「店先に投げ捨てるような仕草だど！？　確かに花を冒瀆しまくりだ！」

店員「閉店、ガラガラ。……またのお越しを、表面上だけ、お待ちしております」

お客「心から待て！」

*

シミュレーションを終え、ふうと一息ついた深夏が、満足そうに呟く。

「……こりやあ……あたし、いけるな、花屋」

『無理だよ！』

全員から総ツツコミだった。こいつ、あれだな。やりたいことと、向いてるものは全く違うという人間の典型だな。

第一のシミュレーションを終え、会長がこほんと咳払い。

「これで皆も分かってくれたかと思うわ。……シミュレーションの大事さが！」

「た、確かに」

俺達は納得してしまった。確かに、これはやっておいてよかったかもしれない。もし深夏が実際に花屋に就職してしまっていたら、それはもう大惨事だったろう。事前にシミュレーションしておいたからこそ、実際の被害を防げたのだ。……まあ、深夏本人はさっきから俺の横で、「花屋もアリだな……」とか恐ろしいことを呟いているが。どうしてあの結果から、アリという判断が下せるのだろうか。案外楽しかったのだろうか。謎だ。

「でも、そういうのでしたら、真冬もちよつとやってみたいかもです！」

姉と俺のコントを見て何か思いついたのか、真冬ちゃんがやる気を出してきた。

妻「はい、真冬も愛してますよ」

夫「……………くうっ！ 生徒会の一存、完！」

外野『おいおいおいおいおい！』

全員からツッコまれてコントが中断してしまったが、俺は流れる涙を止められない！
やばい……………幸せすぎるぜ！ もう、この物語終わりでよくね？ ハッピーなんですけど。
もう、現時点でかなりハッピーなんですけどっ！

ただ、皆からはなぜかボロクソ言われたので、仕方なく、俺は落ち着いて、シミュレーションを再開する。

夫「こほん。……………真冬ー。今、帰ったぞー」

妻「お帰りなさい、あなた。今日もお疲れ様でした」

夫「お、おう。……………えと……………」

妻「あなた。ご飯にします？ お風呂にします？ それとも…………」

夫「！ はう！ これはっ……………ドキドキ！ ワクワク！」

妻「それとも、中目黒先輩？」

夫「まさかの選択肢！」

妻「じゃあ、あなたがお風呂に入っている間に、中目黒先輩を用意しておきますね」

夫「どういう状況!? この新婚家庭、簡単に中目黒調達出来るの!? 却下！」

妻「却下って……。シミュレーションなんだから、いいじゃないですか」

夫「いや、もうちよつとちゃんとしたシミュレーションしようよ！ とりあえず、俺達の未来に中目黒は入れないでくれるかなあ！」

妻「うう……………残念ですが、分かりました。じゃあ、やりなおします」

夫「うん……………俺の幸福、壊さないで下さい」

仕切り直し。俺が帰宅したところまで、戻る。そして、真冬ちゃんのさっきのセリフ。

妻「あなた。ご飯にします？ お風呂にします？ それとも…………」

夫「……………ぐくり……………」

妻「それとも、レベル上げ？」

夫「帰宅直後にまだ働かされんの!？」

妻「だめですよ、あなた。家事は分担してくれないと……」

夫「家事!？ え、レベル上げは家事の括りなの!？」

妻「あなたが真冬のやつてるRPGでパーティをレベル上げしてくれている間、真冬は睡眠をとりますので」

夫「いや、なにこのすれ違い新婚家庭！ まだ寝ないでよ！ 俺を労ってよ！」

妻「あ、間違いました。惰眠を貪りますので」

夫「なんで悪い方に言い直した!？」

妻「あ、そうそう。ご飯なんですけど……」

夫「ふう、さすがにそれは用意してくれてるんだ……よかつ——」

妻「朝はサンドイッチが、食べたいです」

夫「リクエスト!？ 妻が起きる前に、俺が用意しておけと!？」

妻「ふわぁ。今日は早朝から即売会で、真冬、疲れました。先に寝ます」

夫「待とうよ！ これ新婚!？ ホントに新婚シミュレーション!？」

妻「はい、真冬が思い描く、先輩とのラブラブハッピー新婚生活に限りなく近いです」

夫「そ、そう。……なんだろう、これ。俺、美少女と結ばれてるはずなのに……いわばハッピーエンド後のエピソードみたいな設定なのに……なんか思ったほど幸福感が……」

妻「ふわぁ。じゃ、レベル上げ、料理、掃除、洗濯、ブログの更新、アマ○ンの予約再開チェック、録画アニメのCMカット編集、諸々お願いしますです。おやすみなさいです」

夫「ちよ、ちよっと待って！」

妻「はい？ なんですか、もう真冬ねむねむです……」

夫「ええと……そ、そうだ！ ほら、花！ 花束を買ってきたんだ！ 駅前の花屋さんで！

誕生日、おめでとう！」

妻「ふえ？ 花束……ですか？」

夫「ああ！ その、駅前に驚くほど接客に向かない店員のいる花屋さんがあるんだけど。そこで、妻のキミのために花をね……その……」

妻「な、なんてことを！ あなた！ 真冬は……真冬は、失望しました！」

夫「え、ええ!？ なんで!？ やっぱ、花の種類が定番すぎてイヤだったかな——」

妻「その花を買うお金、どうしてゲームに回さないんですかつ！」

夫「そこ!？」

妻「まったく。これだから、金銭感覚のおかしい金遣いの荒い亭主は困ります」

夫「ええー」

妻「家計のこと、ちゃんと考えて下さい。生活費の九割は、ゲーム・コミック・DVDに回すと、言っておいたじゃないですか! ああ、これでまた家計が……」

夫「キミの方こそ家計を考えようよ! その配分、おかしいから!」

妻「それを……なんですか、花つて。まったく。ぶんぶん。ダメ亭主ですね、ホント」

夫「う……な、なんかごめんよ。俺、よかれと思って……」

妻「もういいです。真冬、寝ます。ちゃんと、レベル上げと言って下さいよ」

夫「……はい」

妻「じゃ、おやすみなさいです。……………ガチャリ」

夫「寝室に鍵かけられた!」

妻「(寝室のドア越しに) そりゃそうですよ。真冬、男性ダメですし。なにより先輩を信用していませんから」

夫「偽装結婚!? 仮面夫婦!? お金目当て!？」

妻「失礼なっ! 二人の関係を、そんな風に言わないで下さい! 真冬……悲しいです! あなたと……あなたと真冬は……」

夫「ご、ごめん、真冬ちゃん。そうだよ。価値観の相違があっても、夫婦のスキンシップが乏しくても、お互いを愛する心は本物——」

妻「あなたと真冬は、先輩と後輩じゃないですかっ!」

夫「距離が今と全く変わってねえ——! 俺達結婚したんじゃないの!？」

妻「結婚はゴールじゃないんです。二人の、スタートラインなんです」

夫「いやいやいやいやいや! これじゃスタートライン手前も手前だよ! カタチから入りすぎだろう、俺達! なんか……俺から愛が一方通行気味なんだけど!」

妻「大丈夫です。お金も苦労も一方通行気味ですから!」

夫「何の保証!? 俺が大丈夫じゃないわ!」

妻「そ、そんな……。あなた、真冬を養って……くれないんですか?」

夫「う! いや、そんなことは……」

妻「真冬のこと……愛してます?」

夫「あ、愛してるさ! 勿論だよ!」

妻「じゃ、レベル上げお願いしますですー。おやすみなさい」

夫「……………おやすみなさい」

*

シミュレーションが終了し、真冬ちゃんが活き活きした様子で、感想を口にする。

「真冬、とても幸せでした！ これは……婚約会見も、近いかもですよ！」

「……そうだね」

どうしてだろう。あんなに美少女と結ばれたがっていた俺なのに……なぜだか、今はデ
ンション上がらないや。おかしいなあ。おかしいなあ。

なにやら、会長や知弦さん、深夏も、「うわあ」という視線を俺に向けていた。そこに嫉
妬等の感情は一切無い。唯一感じられるのは圧倒的な「同情」だけだ。

……俺はこのまま、真冬ちゃんを攻略していいのだろうか。相変わらず俺の予定通り
は一つも動いてくれない女の子だぜ、椎名真冬。この子は、やはり稀代の悪女なのかも
しれない。香澄さんの血か。代々家族を振り回す家系なのか、ここは。

俺の様子を見かねたのか、珍しく会長が気を遣って、声をかけてくれる。

「じゃ、じゃあ、ほら、気を取り直して！」

「？ なぜ気を取り直すんです？」

真冬ちゃんが一人首を傾げていたが、それは全員無視。

「次は、私のシミュレーションに付き合ってよ、杉崎。ね？ ね？」

「会長……くすん……」

会長の優しさに涙が出る。会長は不自然な苦笑いで、話を進めてきた。

「よし、じゃあ私の番！ 私は……やっぱり社長だよね！」

「アカちゃん、前もそれだったじゃない」

「う。い、いいの！ 私は社長の器だから、社長以外じゃダメなの！ ほら、やるよ、杉
崎！」

「え、あ、はい」

というわけで、会長の強引な進行により、詳しい設定も聞かされないまま、第三のシ
ミュレーションが開始された。

登場人物……社長・桜野くりむ

???・杉崎鍵

社長「うおっほん！ 私が社長である！」

???「シヤチョサン、シヤチョサン。ウチノミセ、カワイイコ、タクサンダヨ」

社長「ほう、じゃあ今日はこの店入っちゃおうかな……ってあんた誰よ！ というか、私がやりたいのは、本物の社長さん！ そういうのじゃないから！」

???「そう言われても……。じゃあ俺は何の役を……」

社長「そんなの自分で考えなさいよ！ いくらでもあるでしょう！」

???「じゃあ……。……よし、いきます！」

社長「うおっほん！ 私が社長である！」

???「ちいーつす！ 今日も冷えるなあ。おい、その社長。とりあえず茶淹れて」

社長「はい、ただいま……。って、だからあんた誰よ！ 社長を顎で使うってどういう役職なのよ！」

???「お気に召しませんか」

社長「召しませんねえ！ やるなら、普通の平社員やってよ！」

???「最初からそう言って下さいよ……」

社長「最初から分かってよ……」

登場人物……社長・桜野くりむ

部下（サラリーマン・妻帯者）・杉崎鍵

社長「うおっほん！ 私が社長である！」

部下「おはようございます、社長」

社長「うむ、おはよう。今日も張り切って仕事に励んでくれたまえ！」

部下「はい。……ところで、社長。うちって、なんの会社なんですか？」

社長「変なことを訊くな、キミは。そんなの、人材派遣会社に決まってるじゃないか」

部下「決まってるんですか。まあいいですけど。で、どういう類の——」

社長「どういう類も何も、杉崎が色んなところにお出かけして、お金を稼いで、私に渡すだけの会社だよ！」

部下「それは会社!? 俺が社長養ってるだけじゃ!?」

社長「ちなみに、年商二千兆」

部下「俺すげえ頑張ってますね！……ええと、その間社長は、なにしてるんですか？」

社長「うん？ 私？ えと……。……主に会議、かな」

部下「お、重役会議ですか？」

社長「うん、アニマル会議」

部下「脳内会議かよ！ よくそれで年商二千兆超えたな！」

社長「クマさんがいい意見出すんだよ」

部下「クマさん凄え！ 何者だよクマさん！」

社長「あとハゲタカさんもいい意見出す」

部下「なんか違うハゲタカさんも棲んできますよねえ！……それにしても、こんな状況で二千兆稼ぐなんて、一体俺達どういう会社——」

社長「零細企業」

部下「違えよ！ 絶対言葉の意味分かってませんよねえ！ ニュースで聞かじったような言葉、言いたかっただけですよねえ！」

社長「じゃあ、しがない中小企業」

部下「二千兆稼いでんのに!? いやまあ、確かに二人でやっているというのは、規模が小

さいとも言えますが……」

社長「主に醬油差しを取り扱ってます」

部下「ジャンル狭っ！ え!? それで年商二千兆!？」

社長「でも杉崎の給料は手取り九万円」

部下「バイトレベル！」

社長「え？ 年収だよ？」

部下「撤回！ バイトレベルにも達してねえ！」

社長「私のアニマル会議と、杉崎の営業、販売、接待、契約、製造、発注、広告、取材、研修、仕入れ、新人教育、資金調達、エトセトラによって、この会社は成り立っています」

部下「俺の給料配分絶対おかしいですよねえ!？」

社長「まあ、全ては私のアニマル会議ありきだからね。ちなみに私の年収は二千兆引く九万円」

部下「貰いすぎですよ！ つていうかうちの会社、どう成り立ってるんですか！ 活動資金も無いんですけど！」

社長「そこはほら、杉崎の手腕で」

部下「俺働き過ぎでしょう！」

社長「花屋に行けばテキトーに対応されるし、家に帰れば、嫁にレベル上げさせられるしね」

部下「未来の俺、可哀想すぎる！」

社長「ほーら、いいから杉崎、派遣先に行きなさい」

部下「はあ……じゃあ、行ってきます。よっこらせ」

社長「ちよつと杉崎。どこ行くつもり？」

部下「へ？ いや、だから、派遣先に行くため外に……」

社長「だったらドアじゃなくて、そのトランスポーター（転送装置）を使えばいいじゃない」

部下「うちどういう会社！？ え！？ このシミュレーション、どれぐらい未来に……」

社長「私の大学卒業直後だから……五年後ぐらいかな」

部下「日本の科学の進歩ハンパねえ！ 未来が楽しみになってきましたよ！」

社長「いいから、ほーら、早く行きなさいよ、杉崎。私もここから、派遣先である青い地球を見守っていてあげるから」

部下「ここ本格的にどこ！？ え、うちの会社、どこにあんの！？ 重力ある！？」

社長「ほーら、いいから早く行きなさいよ。早くしないと、邪神ギャルボロスの能力によって地球が太陽にぶつかっちゃうよ」

部下「今どういう状況！？ なんか五年後世界観レベルで状況変わってますよねえ！？ 俺達仕事してる場合じゃないですよねえ！？」

社長「ふ、だからこそ醤油差しが売れるのよ」

部下「なにその『これこそ逆転の発想』みたいな言い方！ 時代の先読みしてますよ的な余裕！ 全然意味が分からないんですが！」

社長「常人には理解できないだけだよ。大丈夫。私の言う通りにしていれば、全部上手くいくから。『あの一見無意味に見えたアドバイスは……この時のための伏線だったのか！』的展開が、杉崎の人生には溢れているはずだよ。うおっほん」

部下「うちの社長凄え！ な、なんかよく分かりませんが、とにかく、派遣先で頑張ってくださいす！」

社長「うむ、それがやがて地球、ひいては宇宙、いや、全時空を救うことになるであろう」

部下「最後まで仕事内容分からなかったけど、俺、妙にやる気出てきました！」

社長「うむ！ ゆけい、スーパ―平社員杉崎！」

部下「アイアイサー！」

＊

「ねえよ！」

コントが終わった瞬間、深夏がキレていた。俺と会長はびくんとそれに怯える。

「な、なに怒ってんだよ、深夏。いいじゃないか……楽しかったんだし」

「いや楽しいとか楽しくねえとかじゃねえし！ 今やつてるの、シミュレーション！ S Fを楽しむっていう話じゃねえだろ！」

「……ふふふ、分かってないなあ、深夏。五年後を、楽しみにしてなさい」

「なにその不敵な発言！ いいさ！ あたし、そんな未来にならないに、全財産かけるよ！」

「それが年商二千兆を誇る会社の土台になるとは、この時の深夏は、まだ知らないのだった」

「あたしの金が資本金！」

そうして会長がやたら伏線を引いたところで、会長のターンも一区切り。

さて、俺は全部に参加してるからいいとして、あとシミュレーションをやってないのは知弦さんだけだ。

知弦さんの方を見ると、彼女はにこつと俺に微笑む。

「じゃあキー君。早速、私のシミュレーションにも付き合って貰おうかしら」

「う。知弦さんのシミュレーション……ですか……」

「なによキー君。イヤそうね？」

俺は思わず黙ってしまう。そりやハーレムメンバーとの未来を夢見るのは基本楽しいが、しかし相手が知弦さんとなるとなあ。どうせ俺は奴隷的な役柄で、彼女にムチで叩かれたり罵倒されたりと、そんなシミュレーションをさせられることが目に見えている。

顔を青くする俺に、しかし知弦さんは、意外なことを言ってきた。

「そんな不安そうな顔しないで。大丈夫。私、キー君が嫌がるシミュレーションなんて、しようと思ってないわ」

「え？ そうなんですか？」

「そうよ。むしろ、キー君的には、嬉しい部類に入るんじゃないかしら」

「？ なにするんですか？」

訊ねると、知弦さんは妖艶に微笑み……そして、告げる。

「キー君の愛人よ」

[illegible]

シミュレーションその4 愛人・紅葉知弦

登場人物……愛人・紅葉知弦

男性（サラリーマン・妻帯者）・杉崎鍵

男性「あ、愛人……愛人かあ」

愛人「なによキー君。ハーレムハーレム言う割に、いざとなったら煮え切らないわね」

男性「いや、俺の考え方は基本、本当の意味でハーレムなんで。二股はかけるけど、妻と愛人みたいに関係性を分けるというか、愛する人に区別をつけるみたいなやり方は、若干

思想に反するところもあるというか……」

愛人「な、なんなのそのキー君の、純粹なんだか不純なんだかよく分からない感性は。いから、今はシミュレーション。割り切つて」

男性「そ、そうは言いますが、未来の俺には真冬ちゃんという、愛すべき奥さんが――」

愛人「そうね。貴方には確かに……家で趣味に没頭しては、夫をこき使い、お金を浪費し
 せどころかイチヤイチヤえさせてくれない奥さんが、いたわね」

男性「……………不倫は文化です」

妻「先輩!？」

なんか俺達のコントに真冬ちゃんが一瞬涙目で入ってきてしまったが、無視。改めて、俺と知弦さんは、愛人関係を始めることにする。

男性「ふう。今日も仕事、疲れたぜ」

愛人「あーら、あなた。またうちに来ちゃって。奥さんのとこ、帰らなくていいの？」

男性「ふ……分かってるだろ？ 知弦。俺の安息は、ここにしかないんだよ」

愛人「悪い男。うふ」

男性「……………いや、もう、ホントに。会社はあんなだし……花屋ではあんな対応されるし……家に帰ったらあれだし……。……ぐす……」

愛人「撤回。可哀想すぎる男。よしよしよし。撫でてあげるわ、こちらにいらっしやい」

男性「……よいしょと」

愛人「なでなで。なでなで」

男性「……うん、なんか、思ってたよりいいな、愛人！ 流石愛する人と書くだけある！

俺の抱いていたドロドロイメージと、ちよつと違う！」

愛人「うふふ。私はキー君が癒されてくれたら、それでいいの。たとえ奥さんになれなくてもね」

男性「ち、知弦！ やべえ！ 涙が止まらない！」

愛人「うふふふ……」

妻「……………」

なんかこの場にいる設定じゃない子の冷たい視線を感じるが、それは無視。

男性「よし……愛人のシミュレーションなんですし……これは……えろいことしても……」

愛人「今日はだーめ。」

男性「な、なんだって！」

愛人「今日はキー君のために、料理を作ったのよ。だから、こっちを楽しんで帰ってね」

男性「くっ……！ なんて……なんて魔性の女！ そんな風に言われたら、断れないじゃないかあ！ 流石愛人だぜ！」

愛人「そりやそうよ。なんてったって私、プロの愛人だから」

男性「プロの愛人!?」

愛人「ええ。東京愛人技術専門学校を卒業してるからね」

男性「愛人技術専門学校!? あれ!? なんだろう!? 一気に愛を感じなくなってきたぞ！」

愛人「その私にかかれば、えつちいこと無しに、男を手玉にとることなんて容易いのよ」

男性「あれ!? 未だに肉体関係とか無い設定なの!? 俺と愛人との関係、意外とプラトニックだったの!? じゃあこれ、そもそも不倫って言うの!?」

愛人「そりや妻以外の女の家に行って手料理振る舞われていたら、精神的不倫でしょう」

男性「そ、そうか……。……しかし、なんだろう、このもやもやは」

愛人「ほら、ぶつぶつ言っていないでご飯にしましょう」

男性「あ、ああ……そうだな。うん……まあ、癒されてはいるんだし、いいか……」

愛人「はい。私の手作りの……」

男性「なんだろう。妻から男を奪い取るノウハウ学ぶ専門学校通ってたぐらいだから、料理の腕もあるんだろうし……。あれかな。肉じゃがとか――」

愛人「醤油」

男性「醤油!？」

愛人「あなたとアカちゃんの会社で作ってる醤油差しに入れて、お召し上がり下さい」

ゴトリ。シミュレーションなのに、なぜか本物の醤油差し（醤油満杯）が目の前に置かれる。

男性「お召し上がるの!？ 俺、これ丸々一本お召し上がるの!？」

愛人「ささっ、ぐいっと。おつぎいたします」

男性「いやいやいやいや、なに『いい女』気取った『お酌します』的所作してんの!？ どんなにカタチから入っても、持つてるの醤油だからね!？」

愛人「愛情沢山込めて作ったのよ」

男性「醤油を!？ 一から!？」

愛人「大豆から作ったわ」

男性「いやそりや凄いいけど！ 凄いいけども！ そこまでする力あるなら、ちゃんとした料理にまでしてくれても……」

愛人「……私の醤油の一杯も飲めないと言うの?」

男性「誰の醤油だろうとコップ一杯は飲めませんよ!」

愛人「……そう。……わかってたわ。私は、愛人ですものね。都合のいい女よ。貴方に求められる以外のことを、してはいけないというのね……」

男性「いや、まあ、確かに俺の言ってることはそうだけども!」

愛人「いいわ。過ぎたマネをした、私が悪かったのよね。ごめんなさい。今、片付けるわ……」

外野『……………』

男性「え、なに、このギャラリーからの『女の敵』を見るような視線!」

愛人「じゃあせめて、デザートだけでも、食べていって下さいな」

男性「え、あ、うん……。まあ、デザートなら……。素材段階まで遡っても、砂糖とかだ

ろうから、醤油よりは無理じゃな——」

愛人「はい、苗」

男性「何の！？ 素材段階どころか、準備段階の手前の手前だとう！？」

愛人「土から厳選しました」

男性「いや、だから腕を振るう部分がおかしいんだって！ 土選ぶ暇あったら、料理を作ろうよ！」

愛人「あらやだ……この人ったら、農業全否定だわ……これが価値観の相違かしら……」

男性「そうじゃないよ！ そうじゃなくて……俺は、愛人にもっと普通の家庭っぽさを求めているだけっていうか……」

愛人「家庭では得られない非日常を提供するのも、愛人の務めと教わったわ」

男性「いや、確かにそれはそうなんだけど！ 非日常のスパイスが効き過ぎなんだよ、知弦さ……知弦の場合！」

愛人「あらあら、キー君ったら♪ 今日私の前でだけハッスルしちゃって♪」

男性「セリフだけは愛人っぽいな！ やってることアレなのに！ もっと過程を大事にし

て！」

愛人「キー君は、過程より家庭を大事にすべきだけだね。………ふ」

男性「うざい！ なんだその『うまいこと言ってやったわ』感！ っていうか、愛人やってる人間が今更何を言ってるんだ！」

愛人「ふわあ……。さて、あなた。そろそろお帰りになられたら？」

男性「飽きたよなあ！ 今、確実に愛人ごっこ飽きたよなあ！ なんか俺の方が都合のいい男になってる気がするんですが！」

愛人「ほら、私が今日一緒にお茶した時、真冬ちゃん、新しく買った対戦格闘をキー君と遊びたいって言ってたから、早く帰ってあげなさいよ」

男性「なんで貴女うちの妻とそんな良好な関係築いてんの！？ ドロドロ展開どころか、むしろ俺が二人に弄ばれてる感が出てきてない！？」

愛人「しつこい男は嫌われるわよ」

男性「手料理として醤油出す女はもっと嫌われると思うけど！」

愛人「キー君はソース派だったかしら？」

男性「そういう問題じゃねえよ！ はあ……俺、どうしてこんな人と愛人関係を……」

愛人「それが専門学校マジック」



男性「東京愛人技術専門学校すげえ！」

愛人「というわけで、キー君。またね」

男性「……分かりましたよ。帰ればいいんでしょ、帰れば！」

俺は、勝手に知弦さんと反対の方に玄関を設定して、そちらに歩いていく。玄関を開け、身を外に出し、そしてさっさと閉めてこのコントを終わらせようと——していると、知弦さんがパタパタと寄ってきて、去り際の俺を引き止めた。

俺が不思議そうにしていると、知弦さんは、架空エプロンをいじりながら、もじもじとした様子で、頬を赤くしながらうつむき加減に告げる。

愛人「……その……また、来てね？」

男性「っ！」

その、あまりのいじらしさに、俺だけじゃなく、生徒会中がズキyunと胸を撃ち抜かれた！俺は脊髄反射的に答える！

男性「毎日でも来るに決まってる！」

その言葉に、恥ずかしそうに微笑む知弦さん。

……………。

……………愛人、万歳。

＊

「知弦さんは、いい愛人になるよ」

シミュレーションが終わり、俺は、早速知弦さんにそう声をかける。隣に居た会長が、「いや、それ微妙に褒め言葉じゃないから」とツツコンで来ていたが、概ね同意見でもあるようだ。椎名姉妹も会長も、まだ「愛人・紅葉知弦」の魅力にぼーっとしている。

しかし当の知弦さんとは言えば、自分の席に戻り、いつものクールな表情に戻っていた。「確かに効率は良さそうね、この生活。……何人かけもち出来るかしら」

「悪女!？」

「需要と供給が成立してるのだから、いいんじゃないかしら」

「いや、もっと純粹に恋しましょうよ!」

「不倫しているお前が言うのもな……」

深夏にツツコまれてしまった。いや、そりやそうなんだけど! そうなんだけどさ! どちらが悪質かと言ったら、知弦さんの方だと思うのは俺だけなのか! 男の勝手な価値観なのか!?

数々の納得いかないことはあるものの、それぞれのシミュレーションは一段落する。

そして、会長がまとめに入った。

「この惨状からも分かるように、生徒会メンバーは将来に不安がありすぎるわ!」

『確かに』

「うん、全員で私をジツと見て頷いたのはさておき。もっと、ちゃんとしなきゃ駄目だよ!」
『そうですね』

「うん、だから、なんで私をジツと見ながら答えるのかはさておき。夢があるのは結構なことだけど、それを叶えるためには、今からしっかり努力しなきゃ駄目なんだよ!」

『ホント、そうですね』

「だから、どうして私をそんなにパツチリした瞳で見るのかは分からないけど。とーにかーく!」

会長は立ち上がり、いつものように結論を口にするべく、机を叩く!

「皆、私が面倒見なくても、ちゃんと生きてかなきゃ駄目なんだからね！」

『』

その言葉に。

俺達は、ツツコミどころか、何も……何も答えられず、思わず、押し黙った。

会長はいつも通りに、ぷんぷんと憤慨しながら話を続ける。

「いーい？　いつまでも、私に甘えてちゃ駄目なんだよ？　この偉大な会長の庇護下にいられるのは、あと半年も無いんだからね！　生徒会の権力を使えるのは、この学校でしかないからね！　七光にばかり甘えてないで、皆、自立しようね！」

「……………」

言葉が、出て来なかった。分かっている。会長が言っていることは、ツツコミ所満載だし、こんな空気になることを望んでるわけでもないし、とにかく、とにかく、何か口を開かなきゃいけないことは、皆、理解している。

この場面で押し黙ってしまう理由なんて、ホントは、ない。ないはずだ。でも。

言葉が、出て来ない。

だってそれは。

今まで俺達があえて触れないでいた、迫り来る「別れ」の、話だったから。

何か言わなきゃいけない。

今までなら、軽口叩いて、怒られて、笑い合って、くだらない会議のオチがついて、終わるところだ。それが、ベストだ。それが、俺達は、楽しいんだ。わかってる。なのに。

誰も、口を開けない。

会長以外は。

彼女は俺達の空気を意に介することもなく、ぽふっと自分の席に座り直すと、勝手に話を進めていた。

「そもそも、さっきのシミュレーションは、杉崎をサラリーマンとか既婚者にしちゃったのが、間違いなんだよ。そこがもう、狂っちゃってるから、変な結果になるんだよ」

「……………は、は」

俺の、ようやく絞り出した歪な笑い声に、会長がぷくっと頬を膨らませる。

「笑い事じゃないよ！ これは、ある意味、杉崎に全てがかかっていると言ってもいいんだよ！」

「俺に……ですか？」

「そう！ 杉崎の未来が変われば、皆の未来が変わるんだよ！」

会長のそのセリフに。俺は、ようやく、なんとか自分を取り戻して、答える。

「やっぱり俺は、ハーレムの主ですもんね！ だからこそ、皆の未来は俺にかかっているというわけですね！」

「そ、そういうことじゃないよ！ とにかく！ 杉崎は、さっきのサラリーマン以外に、やりたいことないの？」

「俺のやりたいこと……ですか」

「そ！」

会長に迫られ、俺は、ちらりと周囲のメンバーを見渡す。皆も、幾分余裕は取り戻し、笑顔を見せてはいたものの……どこか、ぎこちなかった。

もうすぐ来る別れ。

「皆そんなの、とつくに意識している。ずっと、意識している。でもだからこそ、そういう話は避けてきていた。だけど。会長は、それを、許してくれなかった。」

「俺の夢なんて……そんなの……ただ皆と……」

「ん？」

そう言いかけて、しかし、ぐっと堪える。

会長自身は、深いことなんてなーんにも考えちゃいないだろうけど。それは、分かっているけど。それでも……彼女はやっぱり、俺達に警告したんだと思う。

電車の中で夢を見るかのように、心地良くまどろみながら前へ進んできた俺達の肩を、「そろそろ終点ですよ」と叩いた。

ここから先は、もう目を閉じては、いけない。いくら心地よくても、寝過ぎしては、いけない。

だから。

俺は、会長の目を見て、答えた。

「俺は……起業でもしましょうかね」

「起業？ 杉崎が？ 社長さんやりたいの？」

会長が意外そうに目を丸くしている。皆も、少し驚いているようだった。

俺は……ニヤリと笑って、説明する。

「ええ、社長。それで、ここに居るメンバー、全員雇います！」

「また杉崎は、そういう……」

会長は少し怒っていたが、しかし、それでも俺は、譲らなかった。

「今回ばかりは、ちよつと本気ですよ、会長」

「む」

「俺は、やっぱり、自分の大好きな人達を守って……時に力を合わせて、生きていきたいです。だから、社長。夢は、美少女だらけの企業の、社長ですよ」

「採用基準がルックスとか、駄目だよ！ 差別だよ！」

「いいんです。それが俺の会社なんですから！ それに、その夢のためになら、俺は、いくらでも努力しますよ！ むしろ、今からしますよ！」

「むむむむ……」

どうやら自分が期待した答えとは違ったらしく、会長は腕を組んで唸っている。

しかし、他の皆は、どこか気の抜けたような笑顔で、俺の方を見てくれている。

「まったく、鍵は。お前なんか社長の器じゃねーだろ。ま、給料ちゃんと払うなら、あたしはOLとして働いてやってもいいけど……無理だろうな」

「そーです。先輩は売れない作家さんあたりがお似合いですよ。真冬と一緒に、インドアの道に行きましょう！」

「何やりたいか決めもせず、漠然と『社長になりたい』なんて言ってる人は、えてして成功しないものよ。私が協力でもしない限りね」

そんな風に皆が言ってくれる中。

会長はどうやら自分だけ仲間はずれっぽいとでも察知したのか、「にやー！」と奇声を上げた後、俺達に叫んできた。

「ずるいよ！ じゃ、じゃあその会社、やるなら私が社長やる！」

「会長、俺の夢横取りですか」

「私も元々社長やるつもりだったから、いいんだよ！ ええと、きゅーしゅーがつーしちゃうんだよ！」

「自分で人の夢聞いておいて、吸収しないで下さい！ どんだけ酷いんですかつ！」

「うるさい！ 私も、そっちの会社の人材が欲しいんだもん！」

「な、なんてワガママな……。……あれ？ でもそれじゃあ結局、俺達やっぱりずっと会

長の庇護下なんじゃ……」

「……………」

「……………」

会長は、汗をだらだらかき出し、そして、さっと目を背けて、告げる！

「今日の会議、しゅーりょー！」

『（結論がブレたから逃げた！）』

驚きのブレっぷりだった。前言撤回。やっぱりこの人、なーんも考えちゃいない。

本当に会長がかちゃかちゃと片付けを始め、皆も苦笑してそれに倣う中、俺は、一人そつと皆の顔を眺める。

（それぞれの道……か）

何もかも、変わらずにはいられない。

少なくとも俺達はこれから生徒会じゃなくなるし、高校生でなくなるし、学生でなくなり、子供でもなくなっていく。

変わらずには、いられない。それは避けられないし、避けるべきでもない。

でも、だったら。

「ほら、なにしてるの、杉崎！ 今日やしゅーりょー！ 雑務もなし！ 帰る帰る！」

「はいはい、分かりましたよ」

『はい』は十回で充分！

「はいはいはいはいはいはいはいはい……って、長いわ！」

「杉崎、口より手動かす！」

「ええ！？」

変わらずには、いられないのだったら。

せめて、いい方向に変わっていけるよう、努力しよう。

飛鳥や林檎の時のようなことは、二度と繰り返さない。

例えそれが、どんな茨の道だったとしても。

「鍵、早くしろー」

「先輩、こっちですー！」

「キー君、帰るわよ」

「ほら杉崎、さっさと生徒会室から出る出るー！」

皆に促され、カバンを手に取り、言われた通りに生徒会室を、出る。それを見計らって、

会長がガチャリと鍵を閉めた。

「さ、いこ！」

「はい……そうですね」

皆が廊下を歩き出す中、一人、生徒会室を振り返り……そして、今度は前を歩く四人の少女達の、笑顔を見る。

……………。

「そう、だよな」

一人、呟く。

大事なことは、ずっと生徒会役員であることでは、ないと思った。